#### 慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

· · ·	
Title	スコット・ニアリング著 東欧の社会主義
Sub Title	
Author	平野, 絢子
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1963
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.56, No.4 (1963. 4) ,p.373(81)- 374(82)
JaLC DOI	10.14991/001.19630401-0082
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19630401-0082

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

### 新刊紹介

### ---比較経済社会学的試論-『共同体の史的構造論 住谷一彦著

展にとって「共同体」の解体の問題は、国内 市場の狭隘さや二重構造の問題と深く関わり た。現代日本経済における一層の工業化の進 級的主体の視角そのもの を 内側から決定し び関心の指向性によってさまざまでありえた 主義の形成を担った社会層の歴史的性格およ 的・文化的諸条件との関連において当該資本 本主義の発達程度ならびに与えられた 歴史 体の解体又は消滅の問題をとりあげ、各国資 資本主義の成立過程に於て必ず直面する共同 めたものである。「序章」=「共同体論の定位 発表した「共同体」に関連する論文十篇を収 本書は著者が学窓を出てから十年余の間に またそれこそが問題の解決に実践する階 日本資本主義分析に関連して は、

やウィットフォーゲル「東洋的専制主義」な 化人類学の業績(スチュワード「灌漑文明」 経済的基盤をなす「灌漑社会の成立」論、文 を扱った第一論文、アジア的専制主義の社会 形態の原型たるべき「原始共同態の土地所有」 の諸形態」を論じ、次いで共同体の歴史的諸 る。「後篇」は、「序論」として「『共同体』 ンニース・デュルケム、マッキーバー及びウ エーバーの集団類型・共同体論の三篇を収め た論文、次いで「集団類型論の歴史的展開ー 体の諸形態を発展的・段階的に把握せんとし 国・印度・オリエントなどのアジア、イスラ ―『共同体論』の視角から ックス・ウェーバーの『共同体』論― ックス・ウェーバーにおける『資本主義の精 「前篇」は「共同体論史研究」と題されて「マ 共同体論の現代的意義を論じておられる。 ーバー社会学の基礎概念し して割愛している)という問題をも含めて、 あっているし、旧「共同体」の解体ー い共同体の形成(本書では別の機会に扱うと ギリシャ・ローマ、ゲルマン等の共同 - 『共同体』解体の起点-ー」と題するテ 」と題する、中 し、と、「マ

―-ウェ 全篇を通じて日本資本主義の底辺をなず共一がある。 した「ゲルマン・デ・ブレ修道院所領明細帳を中記めて、 心にして共同体の細胞たる家族の構造を究明れる。 した「ゲルマン的共同体の家族構造」、信州蓼れる。 した「ゲルマン的共同体の家族構造」、信州蓼れる。 した「ゲルマン的共同体の家族構造」、信州蓼れる。 同体論』分析」を収める。 同体論』分析」を収める。

全篇を通じて日本資本主義の底辺をなす共 の〇円) ―中 村 勝 己― の一の一の一点である。(有斐閣・A5・三八一頁・一六 のである。(有斐閣・A5・三八一頁・一六 の一次の一点である。(有斐閣・A5・三八一頁・一六 の一次の一点である。(有斐閣・A5・三八一頁・一六 の一次の一次の一方。

大岩信太郎・林 達 訳ルートヴィヒ・ボイティン著

# 『経済史学概論』

を期すことは困難であるが、訳者らの謙遜にのに接し、訳者らのご努力を多とすること切のに接し、訳者らのご努力を多とすること切ける。

もかかわらず、その点が見事に克服されているのは喜ばしい。経済史をどう扱ったらいいるのは喜ばしい。経済史をどう扱ったらいいか。終始これは私たち経済史学徒を悩ます問題であるが、そのための一つの処方箋といったらいいものを、手近かなところまで届けてくれた訳者らに対し深く感謝しなければならない。なお巻末には解説が付してある。読者はこれによって原著の主張するところの大体を知ることができ、かなり便利である。

経済史の研究対象が経済現象であるということに異論を差挾む余地はない。しかし問題は経済現象を生活のなかでどう位置づけるかにあった。著者は経済を文化の全体関連のなかでみる。経済は現実のただ一部分でしかないというのであった。経済は現実のただ一部分でしかないというのであった。経済はいり登りでしかないというのであった。経済はいりは歴史学ので生活の大抵の部門に対し強い影響力を持っていた。しかし著者によれば、経済だけが根本において生活の全体を規定するというのではない。かくて経済現象をその本来の位置にないて理解するということが必要になって来る。著者において経済史はいわば歴史学のであった。しかし著者は経済史を歴史学のなかに深部門として把握されることになったのであった。

掃という実践的課題を果そうとしたのであっ を示し、ドイツの学界に充満する敗北感の一 著者はドイツの経済史学が持つ伝統的な強み 扱ったらいいか。これに対する解答を通じて ない事情は重要である。実にこれはドイツの 経済史学が戦後その指導的地位を奪われたと そうした問題が繰返し提起されなければなら いう憂うべき認識から発した。経済史をどう ようとしたのであった。 しかしこ の段階で これを果すためいかに振舞ったらいいか。 事業をおわされていることは明白であった。 値の偉大さを示すことを究極の課題としてい たのであった。もはや経済史家が国民教化の そしてこれによって世界を形成する労働の価 本質をみた。経済史は経済現象を取上げると いわばそのための指針を著者はここで与え ならない。著者はここに人間の経済的営みの いうことで実にこの果しない営みを跡づけ、 によって世界を快適な場所に仕立てなければ 積極的な役割を与えようとした。不断の努力 を持つ。著者はかかる観点から経済史に対し 済史は学問「般が有する教化的価値以上の力 く埋没せしめるということで満足しない。経

die Wirtschaftsgeschichte, Köln, 1958.(学文社·昭和卅七年五月刊·A5·一六二頁·六

た。原著は Ludwig Beutin, Einführung in

## 『東欧の社会主義』

諸国に対する無偏見の究明という外面的な興 に、読者は単にアメリカ人の書いた社会主義 わかれているが、ここからも認められるよう 一、若干の問題、十二、社会主義の将来、に 化革命、十、最近二十年間の収支決算表、十 育革命、八、社会保障、九、 的政治形態の型、六、新旧圧力団体、七、 四、東欧経済圏の経済的均衡、五、社会主義 産所有関係の変化、三、経済的、社会的計画、 描である。原名を "Socialism in Practice", 本書の内容は、一、社会改革の開始、二、財 きた ペシシルバニア 生れの 生粋の アメリ 人、Scott Nearing のみた東欧社会主義の素 本書は半世紀以上を米国社会主義運動に生 transformation in east europe-東欧における文

刊紹介

八一(三七三)

法にひき入れられてしまうであろう。 味からいつかその鋭いひらめきに充ちた正攻

定期寄稿者である著者は、『自由競争に支配さ うとするのである。月刊"World Events"の 最大の効果を期待しつつ封建的資本主義であ る――筆者)ではなく、"東欧の民衆"は何を間の経済成長の比較の場合いつも持ち出され れる私的企業の社会経済体制』から、協同的 ようとしているかを考察し、それを世に問お か(これは資本主義経済と社会主義経済との かに西欧の生活より低いところから出発した ヴァキア、東独、ハンガリー、ポーランド、 であると確信し、ブルガリア、チェッコスロ 東欧における最近の社会主義経済の発展とそ スとしても知らない。西欧の人々にとって、 った後進国がいかに進んだ社会主義に移行し し、何をしようとしているか。最少の損失と 社会主義諸国は如何なる点に失敗したか、い して彼はこの一九六二年の冬の旅から、東欧 ルーマニア、ユーゴースラビアを訪れる。そ の変化を知ることは平和のためにも是非必要 著者は、社会主義経済 といえば ソビエト 連 せいぜいアジアにおける動きしかニュー

性』の中に生活し、"後進性"の"分析"に明 押しつけがましくないのは、言葉の背後にあ 淡々と語る。この"変化"の指摘が不思議に しかったと欲張ったことを考える。中国と言 でその中でのヨーロッパ的特質をえぐってほ 当面する困難、その打開の各国の違い、そし あらわれる後進性の経済発展の不均衡とその 進性の打破の実現の強調の他に、そこに必ず け暮れている我々非西欧民衆にとっては、後 る分析の確かさから来るのであろうが、『後進 とってそれがいかに望ましいかを理路整然と けでなく現場において発展し、東欧の民衆に せたか、科学と技術がいかに学校や研究所だ マーケット がいかなる形で 農村に 発展した "社会的な"経済発展の途に乗り入れたか、新 所有の型。を打ち破り、いかにして、新じい か、保健行政がなぜ大衆の予防医学を浸透さ しい国家的というよりは協同組合的スーパー おいてそれぞれの場で"古い伝統的な""財産 地帯と資本主義的様式の下にある都市部とに への移行過程で、封建的規制の下にある農村 調整的な、従って当然計画的な社会経済体制 中南米、アフリカにも社会

C

刊・B6・一〇四頁・二州五〇仙) センチュリーパブリッシアース・一九六二年 ないのであるから。(ニューヨーク、ニュー 主義的方式を展望する後進国がないわけでは

一平野絢子—

『かねは入っただけ出る ―パーキンソンの第二法則―』 Œ. ーキンソン著 光 訳

国家経費をはかれ」し えども遠からずである、漫画と逆説、饒舌と 味のよい財政評論集だと思えば、当らずとい る。これは博学な街の財政学者が書いた小気 ス紳士特有の粘っこい筆鋒で痛烈に論難され 負担の重い現代英国が俎上にのせられ、巨額 の浪費を生みだしているかについて、 巨額の税金がいかに脱税のための才能と時間 の国家経費がいかに浪費されているか、また ンの第二法則」の含意である。世界で最も税 してある絶対的な限界を設け、それに応じて 「かねは入っただけ出る。だから歳入にたい ーこれが「パーキンソ イギリ

しらしてくれる。 えって現代財政の疾患をいやというほど思い の錯乱でもなければ錯乱の論理でもなく、 の憂き目にありかもしれないが、論述は論理 真実が錯綜して、読者はときにキリキリ舞い

った奇妙な書物と取組んだ。 に腰を下して、「パーキンソンの法則」と銘う 宿に帰るや、その夜はオランダ風の固い椅子 と法則に首をひねっていた。もちろん彼は下 らず、質問者のF氏がはじめて耳にする名前 うなり周囲の人達が笑声を挙げたにもかかわ いての質問に 答えてくれた人が、「それはパ F氏もその一人である。たまたま徴税費につ ロッパで赤面した日本人も少なくなかった。 は、この法則を知らなかったばかりに、ヨー 国でも同様であろう。けれども二・三年前まで ある人でこの法則を知らない人はない。わが る。少なくともヨーロッパでは、読書に趣味 これは周知のパーキンソンの第一 法 則 で あ 無にかかわらず、一定の割合で増加する・ キンソンの法則にしたがいますネーとい 役人の数はなすべき仕事の軽重、時には有

とはいえ、第二法則は第一法則に続くもの

刊 紹 介

> 者もないとはかぎらない。 た読後感しか残らない明敏叡智に恵まれた読 ばれ、なんとはなく容認された形の命題でし 二〇パーセントにきめらるべきである」とい かないはずだ。「手袋の裏もまた手袋」といっ う言葉なら、成長めざましいどこかの国で叫 してや、「平均課税の限界は、……国民所得の まなければならないほどの書物ではない。ま であるが、どちらも固い椅子に腰を下して読

よい。(至誠堂・卅七年十一月刊・B6・二 八八頁・三八〇円) よ、それは単なる寓話でないことは信用して ンの第二法則」を信用するにせよしないにせ 英国に 少しもひけを とらない。「パーキンソ は「かねは入っただけ出る」ことにかけて、 だれが断言できようか。その上、わが国こそ 痛」は欧米にくらべてわが国が少ないとは、 るいくつかの税金のなんと 重いことか。「税 に近い税金にくらべて、勤労所得にかけられ 当や利子所得の安い税金、株式売買益のタダ ンソンの鏡に映してみるべきである。株式配 けれども「わが眼のうつばり」も、 |古田精司| パーキ

#### 小 野朝男著 『国際通貨制度』

理論からの分析は殆ど存在していなかったと いってもよい。 範囲内で論究されてきており、マルクス経済 とくにこの問題は、主として近代経済理論の ず、一層の究明と整理の余地を残している。 行なわれ、多くの論議と改革の提案を生んで いる。しかしいまだ統一された見解は存在せ との二・三年来、国際通貨制度の再検討が

ている。 国際通貨のあるべき姿(第五章)が考察され 開)・現状分析(第三・第四章の国際通貨制度 の現状)を通じ、あるいはそれらに基づいて、 察)・段階(第二章の国際通貨制度の歴史的展 通貨制度の真の姿を描くことにおかれ、原理 注目さるべき労作である。その目的は、国際 からの始めての体系的な研究であり、大いに (第一章の国際通貨の基本的概念の理論的考 本書は、国際通貨制度に関する後者の立場

まず国際通貨制度の基礎として、金の重要

八三(三七五)